

九州女子大学
人間科学部 人間発達学科 人間発達学専攻

令和2年度
社会人入学試験Ⅱ期
編入学試験Ⅱ期
社会人編入学試験Ⅱ期
帰国子女入学試験
外国人留学生入学試験

小論文

社会人入学試験Ⅱ期
編入学試験Ⅱ期
令和2年度 社会人編入学試験Ⅱ期 小論文 試験問題
帰国子女入学試験
外国人留学生入学試験

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子どもに与えられる課題のむずかしさが、きわめて重要だというのは、決して思考に限定された話ではない。たとえば技能の場合でもそうである。楽器の練習などは、たいてい教則本を使う。教則本は、それを丹念にたどっていけば、むずかしすぎずやさしすぎない課題が、つぎつぎに呈示されるようにできているとあってよい。少なくとも、それが理想であろう。もし課題がやさしすぎると、技能の上達は非常におそくしか進まないことになる。それにとまって、子どもは自分の有能さを味わうことができないために、欲求不満を感じるだろう。ないしは、課題がやさしすぎるために退屈になり、真面目に努力しようとしなくなってしまうかもしれない。反対に課題がむずかしすぎると、そこで脱落してしまうものがでてくるし、そうでなくても練習自体がひどく苦痛になってしまうからである。

しかし、技能の場合には、むずかしさの水準が、ちょうど学習者に適合している必要は、決定的に大きくはない。多少やさしすぎても、それを正確にかつ速く遂行しうようくりかえしさらえば、けっこう技能の向上は保証されるし、むずかしいものであっても、学習者の側があきらめずにやっていると、思いがけない上達をもたらすことが多い。というのは、技能の場合には、いずれにしてもその課題を遂行する手順がはっきりわかっていて、その手順にしたがってくりかえし練習を行えば、そこで獲得された正確さや速さが似た場面にも適用しうるためだと考えてよい。ふたたび教則本の場合にもどるなら、少しやさしすぎるくらいの曲を丹念にさらうことも、それなりに効果があるし、まだ手にあまると思っても、自分の気に入った曲だったら、それにチャレンジしてみることが有効なのである。

しかし、知力を伸ばすということになると話は変わってくる。というのは、知能あるいは思考の場合には、それをどうやって解くかの手順を見出すところに、むしろその本質があるからだ。つまり、問題が与えられたとしても、その解答がわかっているならば、そこでは知能（思考）は働く余地がない。いや答自体がわかっているのでなくとも、それをどうやって解くか、考え方の筋道や解決の手順がわかっているならば、もはや知的活動の働く余地は少ないといわなければならない。一方、課題がむずかしすぎれば、それにどう取りくんでよいのかさえわからないのである。われわれはよく、「もっとよく考えなさい」などというが、「もっと考える」というのがはたして何をさしているのか、いわれる側には明らかでないことが多い。つまり、考えていく筋道やその際の手順が明らかでないために、いったいどうしてよいかわからず途方に暮れているということが少なくないであろう。

だから、むずかしすぎる場合にせよ、やさしすぎる場合にせよ、知的活動はひきおこされにくく、したがってそれが知力を伸ばす機会につながらないだろう、と考えることができる。この点で知力を伸ばす経験というのは、技能を伸ばす経験よりも、そのむずかしさの範囲においてずっとかぎられていると見なければならない。したがって、それだけ細心の環境調整が必要とされるわけだ。

(出典：波多野誼余夫、稲垣佳世子『知力の発達』岩波新書 第6章「問題を与えて考えさせる」より一部抜粋)

問

本文の記事を適宜参考にしながら、子どもの知的活動力を伸ばすために必要な、教育者として適切な課題設定の重要性と学校教育や保育の役割について、あなたの考えを800字以内で具体的に述べなさい。

メモ用紙

(※このメモ用紙はお持ち帰りください)

横書き

5

10

15

20

25

